

## 自我同一性尺度作成の試み

辻 井 正 次

### I. 問題と目的

Erikson, E. H. (1959,1964) による life cycle を通じてのパーソナリティの発達における青年期の課題である自我同一性 (Ego-identity) 概念は、極めて重要な概念である。しかし、自我同一性に関する Erikson の記述は、抽象的・包括的・多次元的なため、自我同一性概念自体が拡散しており、自我同一性の実証的研究を困難にしている。従来の自我同一性研究は、鑑他 (1984), 中西他 (1985) などが展望しているように、質問紙によるアプローチと同一性ステイタス面接によるアプローチがあり、何らかの側面から自我同一性を操作的に定義してきたが、測定法に関する信頼性・妥当性の問題や自我同一性本来の力動的な理解が失われている点などの問題点もある。

本研究では、第1に自我同一性の操作的概念定義を尺度構成によっておこなうことを目的とする。自我同一性に関して多くの研究がされてきているが、自我同一性概念の理解をおしそすめる研究は多くはない。自我同一性概念の尺度によっても測定可能な、主観的・意識的側面である「自我同一性の感覚 (Sense of Ego-identity)」に焦点をあてて尺度作成を行い、因子分析によって独立性の高い下位概念からなる操作的概念化をすすめる。

第2に、自我同一性の操作的概念定義にもとづく自我同一性尺度の作成と、その尺度の信頼性及び妥当性の検討を目的とする。内容的妥当性・因子的妥当性が十分なよう尺度構成したうえで、信頼性や尺度間の相互関連の検討、さらには、同一性形成の対極である同一性拡散感との関連から併存的妥当性の検討を、理論的に関連が予想される他の概念との関連から構成概念妥当性の検討をする。

第3に、自我同一性尺度の高得点者と低得点者に対して、個別に半構造化した質的面接を実施、男女別に比較検討をおこない、発達課題への対処の仕方から、基準関連妥当性の検討をすることを目的とする。

### II. 研究 I ——自我同一性尺度 (EIS) の作成と信頼性・妥当性の検討

#### 1) 予備調査——自我同一性の操作的概念定義——

[方法] 自我同一性の操作的概念定義をするうえで、自我同一性の感覚に焦点をあてて、尺度を作成した、

Dignan, M. H. (1965) の7つの次元をもとにしながら、Marcia, J. E. (1966) らによる同一性ステイタス研究の成果である、青年期の発達課題（領域）への対処の仕方にともなう自我同一性の感覚に焦点づけて項目作成をおこなった。領域としては、職業・価値・性役割・身体・学業・対人関係を考えた。Dignan の7次元につき、20項目ずつ、計140項目を作成し、大学院生8名による項目表現の修正を加えた上で、予備調査を実施した。

調査対象は愛知県下の3大学の1, 2年生336名（男子172名、女子164名）である。

〔結果〕 予備調査の全140項目（5段階評定）について因子分析（主因子法・バリマックス回転）を実施した。Dignan の7次元について検討するために7因子での因子分析を実施したが、Dignan の7次元は抽出できなかった。固有値の減少と解釈可能性から4因子の因子分析を実施し、結果を検討した。因子負荷の.35以上の項目を採用したところ、第1因子（38項目）は内容としては、他者の見た自己と自分の思う自己との一貫性と、情緒的にも、どんな状況でも一貫した自分であるという安定し統合された感覚であり、『自己の一貫性』の因子とする。第2因子（32項目）は内容としては、自己に対する信頼感や満足感、自己受容、あるいは、良好な対人関係をもって他者に受けいれられているという自己に対するポジティブな感覚であり、『自己肯定感』の因子とする。第3因子（16項目）は内容としては、自分の将来への方向性がわかり、そうした目標へ意欲的に向かっていくことで、職業や生き方とも結びついた感覚であり、『目標指向性』の因子とする。第4因子（15項目）は内容としては、他者の前にあっても他者の意図にまどわされず、自分の意志（主体性）を持っているという感覚で『独自性』の因子とする。男女別の因子分析の結果、男女での因子構造の差異は認められなかった。

因子分析の結果をもとに、4つの次元（下位概念）から自我同一性を操作的に定義する。

#### 2) 調査 I ——自我同一性尺度の作成——

〔方法〕 予備調査によって明確化された4つの次元（自己の一貫性、自己肯定感、目標指向性、独自性）をもとにして、予備調査の全140項目について、5名の心

## 自我同一性尺度作成の試み

理臨床家に対して、内容的妥当性の検討を依頼し、4名が自我同一性の項目として妥当とした97項目を採用した。97項目で予備質問紙（5段階評定）を作成し調査Ⅰを実施した。調査対象は、5つの四年生大学の1年生668名（男子343名、女子325名）であった。

【結果と考察】全97項目の因子分析を実施した。4因子での因子分析の結果、第1因子に『自己の一貫性』の項目が、第2因子に『目標指向性』の項目が、第3因子に『自己肯定感』の項目が、第4因子に『独自性』の項目が高い因子負荷を示し、男女での因子構造の差異はなかった。因子分析結果と内容的妥当性とから、『自己の一貫性』19項目、『目標指向性』16項目、『自己肯定感』12項目、『独自性』11項目、計58項目で自我同一性尺度（EIS）を作成した。

EISの信頼性としては Cronbach の $\alpha$ 係数が4つの下位尺度とも十分高い（.81～.91）値を示し、下位尺度ごとの合成得点と各項目との相関係数も全て有意（1%水準）であり、高い内的整合性を示した。

4つの下位尺度のうち、『自己の一貫性』（1%水準）、『目標指向性』（5%水準）、『独自性』（0.1%水準）の3つの下位尺度で男子が女子よりも有意に高い値を示した。また、『目標指向性』については男女ともに大学差がみられ、特に男子では双峰分布を示すなどやや分布がつぶれた形を示した。

4つの下位尺度間の相互相関は.24～.50と全て有意（0.1%水準）な値を示し、相互に一定の関連があることを示した。EISには、一定の下位尺度間の関連はあるものの、十分な因子的妥当性を示しており、また、十分な信頼性を示した。

### 3) 調査Ⅱ——EISの再検査信頼性・併存的妥当性及び構成概念妥当性の検討——

【方法】EISの再検査信頼性の検討と、砂田（1979）の同一性混乱尺度（IDS）との関連から併存的妥当性を検討する。また、先行研究や理論から、特に、『自己の一貫性』や『自己肯定感』と負の連関の予想される不安について、清水・今栄（1981）の特性不安尺度（AT）との関連や、『目標指向性』や『自己肯定感』と正の連関の予想されるFranklの「意味への意志」を測定するPILの日本語版（佐藤（1975））との関連から、EISの構成概念妥当性を検討する。EISとIDSをセットした質問紙aと、EISとAT及びPILをセットした質問紙bによって調査Ⅱを実施した。調査対象は愛知県下の3大学の1年生206名（男子103名、女子103名）である。

#### 【結果と考察】

##### ①EISとIDSの関連について

IDSの項目分析の結果から1項目を削除して33項目で

分析した。EISの4尺度とは、『自己の一貫性』-.64、『目標指向性』-.65、『自己肯定感』-.59、『独自性』-.32と全て有意（0.1%水準）な負の相関を示し、前3つの下位尺度は相互の内部相関係数よりも高い値を示しており、同一性拡散の側面を測定するIDSとの間で十分な併存的妥当性を示している。

##### ②EISとPIL及びATとの関連について

PILについては項目分析の結果から1項目を削除し19項目で、ATは20項目で分析した。EISの4尺度とは、PILが『自己の一貫性』.54、『目標指向性』.70、『自己肯定感』.67、『独自性』.38と全て有意（0.1%水準）な正の相関を示した。また、ATが『自己の一貫性』-.66、『目標指向性』-.47、『自己肯定感』-.64、『独自性』-.48と全て有意（0.1%水準）な負の相関を示した。EISの下位尺度相互の内部相関係数との比較では、PIL、ATとの間で予想通りの結果となっており、十分な構成概念妥当性を示している。

##### ③EISの再検査信頼性

国立N大学の35名に4週間をおいての再調査を実施し、再検査信頼性を得た。結果は、『自己の一貫性』.88、『目標指向性』.92、『自己肯定感』.86、『独自性』.75で、下位尺度間の相互相関係数よりも、かなり高い値であり、十分な再検査信頼性を示した。

### III. 研究Ⅱ——半構造化面接によるEISの高得点者・低得点者の比較検討

#### 【方法】

①被面接者 調査Ⅰの被験者のうちで、面接調査に参加してもよいとした者のなかで、EISの4つの下位尺度ともに33パーセンタイル以下の値をとっている低得点者（L群）と67パーセンタイル以上の値をとっている高得点者（H群）を典型例として、なるべく典型例に近い者、H群男女4名ずつ、L群男子3名、女子5名の計18名を対象とした。全て国立N大学の1年生である。

②面接の質問内容 Marciaの自我同一性ステイタス面接を修正した無藤（1979）を参考にしながら、進路選択、職業、学業・サークル等へのとりくみ、生き方（価値観）、性役割、身体（性）受容、同性・異性との友人関係、家族との関係、全体的自己像について、EISの4尺度のもの4次元が明らかになるように留意しながら、各領域へのとりくみ（対処）の仕方を明らかにしていく半構造化面接を実施した。面接は調査Ⅰの3ヶ月後、筆者が面接をおこなった。

#### 【結果と考察】

##### ①男子の面接内容の比較検討

領域ごとで面接内容にH群とL群とで差があり、全体としても、H群ではしっかりしたものを持ち、何かに一

生懸命のめりこんでいけ、他者に対して自分の意見を平気で主張でき、達成志向がある。それに対して、L群では自分の意見がはっきりせず、うまくまとまらない印象で、統合感が弱く、他者に主張できず、葛藤的である。

#### ②女子の面接内容の比較検討

領域ごとでもかなり差があり、全体としても、H群は男性と同じように目標を持ってやっていき、自立した印象があり達成的だが、性役割に否定的である。それに対してL群は、全員が自宅生で親の期待の枠のなかで、特に疑問も感じずに、自らの価値やキャリア志向を形成していない。また、葛藤的でない者と、男性のL群同様に葛藤的な者がいる。

#### ③半構造化面接によるEISの基準関連妥当性の検討

男女ともH群とL群で面接内容が異っていた。10領域での発達課題に対する対処の仕方を基準として、自我同一性の4つの次元について検討してみると、『自己の一貫性』、『目標指向性』、『自己肯定感』、『独自性』の4つとも、男女での違いは多少とも見られるが、H群の方が自らの対処の仕方にともなって、L群よりも明確な「自我同一性の感覚」を意識できており、そのことから十分な基準関連妥当性を示した。

## 引用文献

- Dignan, M. H. 1965 Ego identity and maternal identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 476—483.
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, No. 1, Monograph 1. International Universities Press, New York.  
(小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1964 *Insight and responsibility*. W. W. Norton. (鑑幹八郎(訳) 1971 洞察と責任 誠信書房)
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551—558.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 27, 178—187.
- 中西信夫・水野正憲・古市裕一・佐方哲彦 1985 アイデンティティの心理 有斐閣
- 佐藤文子 1975 実存心理検査——PIL—— 岡堂哲雄(編) 心理検査学——心理アセスメント—— 城内出版 Pp.323—343.
- 清水秀美・今栄国春 1981 STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 348—353.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215—220.
- 鑑幹八郎・山本 力・宮下博(編) 1984 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版